THE ザ・プレス PRESS 国際高

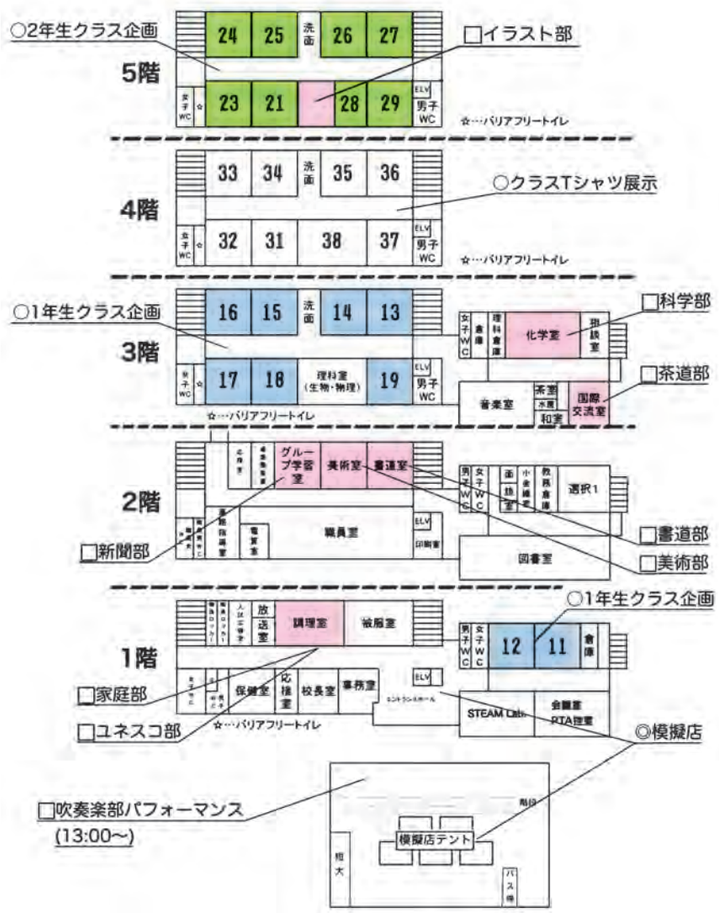
発行所
富山市願海寺水口444番地
富山国際大学付属高等学校
新聞部
ホームページアドレス：https://www.tuins-h.ed.jp
印刷所　北日本印刷株式会社

第36回文化祭 きょう開幕 彩れ、最高の1日を

発表や展示で文化の秋 感じよう

第36回文化祭が今日、盛大に開催される。今年のテーマは「PALETTE ～彩れ、最高の1日を～」。富山短大体育館でのオープニングセレモニー、ステージ発表の後、展示などの自由鑑賞になる。1、2年生は各教室で、テーマに沿って工夫を凝らした展示や企画を準備している。各文化部も展示や発表を行う。また、各クラスを紹介する階段アートや、クラスTシャツも展示されている。皆さん、今日は精一杯楽しんで国際高の「文化の秋」を感じましょう。

文化祭MAP



本日のプログラム

予定	
9：00～9：10	オープニングセレモニー
9：10～9：30	ハンドベル演奏 （1年生　音楽選択者）
9：30～9：40	英語部 海外長期留学者による留学体験発表
9：40～9：50	探究活動 3年生代表発表
9：50～10：00	「高校生とやま県議会」報告
10：00～10：15	メディア・テクノロジー部発表
10：25～11：35	有志発表Ⅰ
11：40～14：50	各展示鑑賞・昼食・模擬店・有志発表Ⅱ
14：50～15：05	表彰・講評
15：05～15：20	放送部　クロージング（スライドショー）

文化部　展示・企画

	タイトル	内容	場所
家庭部	シュシュを探せ!!	クッキーの販売（シュシュを付けています）	調理室
書道部	一筆入魂	作品展示	書道室
科学部	色の科学	化学発光実験、水溶液の色の変化実験	化学室
新聞部	THE PRESS 国際高2026	学校新聞（本紙・速報）、県内・全国の高校新聞の展示	学習室
茶道部	お茶しばきませんか？	お茶会	国際交流室
美術部	「生命は短し　芸術は永し」	美術作品展示	美術室
ユネスコ部	ユネスコ部の軌跡（キセキ）	活動紹介パネルの掲示	エントランス付近
イラスト部	オリジナルスクィーズを作ろう！	スクィーズ手作り体験	2年8組教室後方
放送部	国際高校文化祭の記録2026	クロージング動画	短大体育館
吹奏楽部	オリジナルメドレー	楽曲の演奏	エントランス付近
英語部	Studying Abroad: Our Experiences	留学帰国生による留学体験発表	短大体育館
メディア・テクノロジー部	幸福よりも不幸の方が2倍多い	日頃の研究活動内容の紹介	短大体育館、STEAM Lab.教室

クラス企画

クラス	タイトル	内容
1年1組	アメリカンカジノ 国際支店	カジノゲーム（トランプ、ルーレット）、フォトスポット
1年2組	吾輩の恐怖夜間（ホラーナイト）	ホラーミステリーゲーム　謎解きとお化け屋敷を融合した企画
1年3組	まだまだ夏は終わらない ZE☆	まつり、いくつかの屋台（縁日？）、ヨーヨー（スーパーボール）すくい、射的、恋みくじ
1年4組	ご主人様のハートをBET　萌え萌えメイドカジノ	メイド・テーブルゲーム（ポーカー、UNO、ジェンガ、オセロ）
1年5組	からだ探し	お化け屋敷　無くなってしまった人体の心臓を教室の中から探し出して、特定の場所に持って行ったらクリア
1年6組	引くしかなくね？恋みくじ	恋みくじ＆フォトスポット　恋みくじを引いた人に簡単なアドバイスをして楽しんでもらう
1年7組	プラネタリウム	プラネタリウム　カラフル
1年8組	みんなで彩る 青春・恋愛展	参加型展示会　みんなが共感できるシチュエーションをイラストや写真、短い言葉で展示
1年9組	ディズニーゲーム～夢のゲームワールド～	夢の世界をイメージした外観の中で、お祭り的なゲームを行う
2年1・2組	チキチキ☆アメリカ横断レース in アメリカンダイナー	アメリカンダイナーをイメージした空間で、動物たちのレースを観戦し、どの動物が1位になるかを予想
2年3組	おばけ屋敷	日本の妖怪をテーマにしたお化け屋敷
2年4組	運命の七色	恋みくじや絵馬で、文化祭でしか味わうことができないポップな神社
2年5組	Pearl Hunt	中国、イギリス、韓国のエリアでその国に関するクイズを出題
2年6組	BIGBANG	彩のある宇宙空間を作る　プラネタリウム
2年7組	マリオカート リアル	マリオカートの世界観を現実に再現し、体感してもらう
2年8組	ランタンフェスティバル	来場者がランタンに願い事を書いて、教室をカラフルな空間に
2年9組	Ghost Busters	カラフルなハロウィンの世界に入り込んで、ゴーストを倒す。射的

デグチャリョブさん(36H) ぶっちぎりの3連勝で首位

全日本カート選手権 EV 部門



レーシングカート競技のデグチャリョブ・ティモフェイさん（36H）は、9月23日に東京・お台場のシティサーキット東京ベイ（CCTB）で開催された全日本カート選手権EV部門の2026シリーズにおいて、雨のウェットコンディションの中で圧倒的な速さを見せつけ、まず第5戦を独走で制して7月の第4戦に続く2連勝。そのスピードはナイトレースの第6戦でも変わらず、再びの独走で3連勝を達成し、現在、今シーズンのポイントランキング首位に躍り出ている。



圧巻の走りを見せたデグチャリョブ選手

「全日本カート選手権」は、レーシングカートを使った、国際カートレースやフォーミュラなどの自動車レースに直結する国内カートレースの最高峰シリーズ。環境に配慮し電動モーターを搭載したカートによるEV部門は2022年より新設され、静音性を活かして市街地コースでも開催されるなど、新たなモータースポーツファンを惹きつけている。最高速度は100㌔を超え、モーターの特性上、アクセルを踏んだ瞬間に100%のパワーが出るという。CCTBでは全長約400㍍の特設コースを、第5戦、第6戦とも予選15周、決勝は20周で行われた。

デグチャリョブさんは、KNC EV Kart Racing Teamに所属。今シーズン序盤から速さはあったが、経験不足や自分のミスでなかなか優勝にはつなげられなかった。でも、シーズン後半には3連勝を達成でき、現在は最終戦を前にランキング1位につけている。最後まで全力で戦い、全日本選手権で初めてのチャンピオンを獲得できるように頑張りたい」と意欲を燃やす。

今季、残るは11月23日にCCTBで開催される第7戦／第8戦のみ。ポイントランキングは現在、デグチャリョブさんが133点で首位に立っている。

来シーズンはF4に

「どの大会も、良い結果を出すことを目標に臨んでいる。レースでは自分の実力を発揮できた部分もあったが、ミスによって結果につなげられなかったこともあった。悔しい思いもしたが、自分の課題を見つけることができ、次のレースに向けて良い経験になった」と謙虚に語る。

4歳のときに初めてカートに乗り、その楽しさから「これが自分のやりたいことだ」と直感した。ロシアで、レース活動を2014年から本格的に開始。国際高に入学した一昨年から拠点を日本に移し、昨シーズンは全日本カート選手権OK部門にシリーズ参戦、シーズン1勝を含むシリーズランキング4位を獲得。そして今シーズン、戦いの舞台をEV部門に移した。

この競技について「走行中は自分の走りだけに集中でき、メンタル面でも良い影響がある。また、自分の技術や判断力で速さを追求し、結果につなげられる」ことに魅力を感じているという。

日頃の練習では「速いタイムを出すだけでなく、レースで安定して結果を残せる走りを身につけることが大変」と話す。速さがあっても、レース中にミスをしてしまうと勝利を逃してしまう。そのため、走りを振り返って課題を見つけ、同じミスを繰り返さないように意識している。

「今後も練習を積み重ね、速さと安定感の両方を高めていきたい」と前を見据える。

今後は、レーシングスクールでさらに経験を積み、来シーズンはF4（フォーミュラ4）に参戦したいと考えている。そして「将来的には、SUPER FORMULAやSUPER GTなど、日本のトップカテゴリーで活躍できるレーシンググドライバーになることが目標」と目を輝かせる。デグチャリョブさんの今後に注目しよう。

バドミントン部 全国の大舞台で健闘

県トップを誇るバドミントン部は、10月の国スポ、9月の全日本ジュニア選手権大会と、全国大会で大健闘を見せた。



賞状を手にポーズをとる（右から）安村、麻生、青見の各選手。左は河合監督＝スポカルイン黒石

10月11～14日に青森県黒石市で行われた第80回国民スポーツ大会「青の煌めきあおもり国スポ」に少年女子の部で出場した麻生梨央さん（33H）、青見咲希さん（36H）、安村紗来さん（27H）の本校チームが、5位に入賞した。

膝の怪我を抱えながらの練習が大変だったという主将の麻生さんは「県代表としての責任を感じながら、富山に貢献できるよう全力でプレーした。高校生活最後の大会で、目標としていた全国ベスト8という結果を得ることができてとてもうれしかった」、安村さんは「緊張より楽しめた。全国のトップ選手と戦ったことで、自分の成長や今後の課題を知ることができた」とそれぞれ振り返った。

また、9月19～23日に群馬県で行われた第45回全日本ジュニア選手権大会では、シングルスで安村さんがベスト16、石塚華歩さん（13H）がベスト32に入った。安村さんは「格上の選手を相手に思い通りにいかない試合ばかりだったが、収穫は多かったので次は絶対にリベンジしたい」、石塚さんは「苦しい場面で我慢しきれず、自分からの舞台で戦ったことで自分の課題と成長できる部分を見つけることができた」と話した。

模擬店 今年もいろいろアツアツ



今年の模擬店も、熱い。エントランス前のテントで実行委員が調理したアツアツの特製焼きそば（400円）、フランクフルト（200円）が食べられる他、PTAの方々が心を込めて豚汁を調理する（プログラムの引換券で無料で提供）。

また、竹田精肉店のコロッケ（130円）とメンチカツ（130円）の他、鮭・昆布・ツナマヨのおにぎり（各150円）を販売するブースもある。これらは前売り券販売が基本だが、当日券（現金のみ）もエントランスで買える。どれも数量限定なので、急ごう！

さらに、今年はなんと、キッチンカー3台も出現。「たこ焼きクロ舟」からたこ焼き（8個入り）各種、たこせん、ソフトアイス各種、「MOGMOG」からベビーカステラ各種、「まんぷくまる」からバブルワッフル各種の出張販売があり、エントランス付近には美味しい食べ物がズラリと並ぶ。キッチンカーの支払いは現金のみとなっている。

かざぐるま

最近、私たちの生活を取り巻く環境が大きく変わった。国内では食料品や日用品を中心に値上げが続いている。値上げを受けて変化した購買行動として、訳あり品や賞味期限の近い安い商品を選んだり、セールやまとめ買いを活用したり、購入頻度を減らしたりする工夫が挙げられる。生活が苦しくなり、今まで買えていた物が買えなくなる事態が起きており、値上げは社会全体に大きな影響を与えている★値上げの主な原因として、原材料価格の高騰や円安の影響、天候不順が挙げられる。食料品やエネルギーの多くを輸入に頼る日本は、円安の影響を強く受ける。さらに、猛暑や少雨、集中豪雨といった異常気象が米や野菜、果物などの品質低下や収量減少を招き、店頭価格の大幅な高騰につながっている★政府の主な支援策として、冬季の電気代・ガス料金補助や、ガソリン・軽油の価格抑制、補助金の引き上げなどがある。また、「物価高対応子育て応援手当」の支給や、自治体の実績に応じた支援を行う「物価高騰対応支援地方創生臨時交付金」、さらに、来年4月からの2年間限定で飲食料品の消費税率を1%へ引き下げる方針などが打ち出されている★個人でも、電力・ガス会社の切り替えや未利用サブスクリプションの解約による固定費削減、まとめ買いやキャッシュレス決済によるポイント還元のフル活用など、日々の工夫で少しでも影響を軽減する方法はある。値上げが続く今だからこそ、自分にとって何が必要で何が不要なのかを見直す良い機会かもしれない。時代とともに変化する社会に、私たちも柔軟に対応していく必要がある。

【西遥香】

美術部 富山大空襲 記憶継承プロジェクト 部員の絵 県民会館に展示

美術部が昨年から取り組んでいる「富山大空襲の記憶継承プロジェクト」で部員がアクリル絵の具を使って描いた絵8点が、8月13～18日に県民会館で開催された「戦時下の暮らし展」で展示された。16日には語り部や部員によるトークイベントも行われ、多くの来場者が耳を傾けた。



講演会では、語り部の西田亜希代さんと七虹さん（31H）母子が登壇。富山大空襲に至る歴史背景や、空襲を体験した祖父の故・佐藤進さんの記憶や思いをたどりながら、三世代で取り組んできた伝承活動について語った。七虹さんは「語り継ぐこと」の意義をずっと考えていた。若者には学びを通して、戦争は合理的な解決には決してならないということを伝えていきたい」と話した。



美術部員の絵の傍らで伝承活動について語る西田七虹さん（右奥）＝県民会館

そうした歴史を、体験者の話を聞き取りながら、時間をかけて絵として現代に表現したのが美術部。ギャラリートークでは、部員が自分の作品の傍らに立ち、作品を作る上で工夫した点や感想などを一つずつ話した。顧問の野村一晨先生は「体験者の話から感じ取った情景や感想を丁寧に表現した」と振り返った。

話していた。体験者の見た光景を完全に再現するのは難しくても、色を付け、当時の心の動きを絵で表すことで鑑賞者に強いインパクトを与えるものになった」と評した。

防空頭巾をかぶった女の子の姿を、あえて色彩豊かに描いた部長の古川優香さん（32H）は「戦争絵画は赤黒い色彩を基調としたものが多いイメージだが、体験者の『空襲明けの朝日が印象的だった』という言葉が特に心に残ったのもあり、戦火を乗り越えた先の情景や希望などの様々な感情を表現した」と振り返った。

美術部が昨年から取り組んでいる「富山大空襲の記憶継承プロジェクト」で部員がアクリル絵の具を使って描いた絵8点が、8月13～18日に県民会館で開催された「戦時下の暮らし展」で展示された。16日には語り部や部員によるトークイベントも行われ、多くの来場者が耳を傾けた。

特集 想定外の災害 「明日はわが身」

大地震

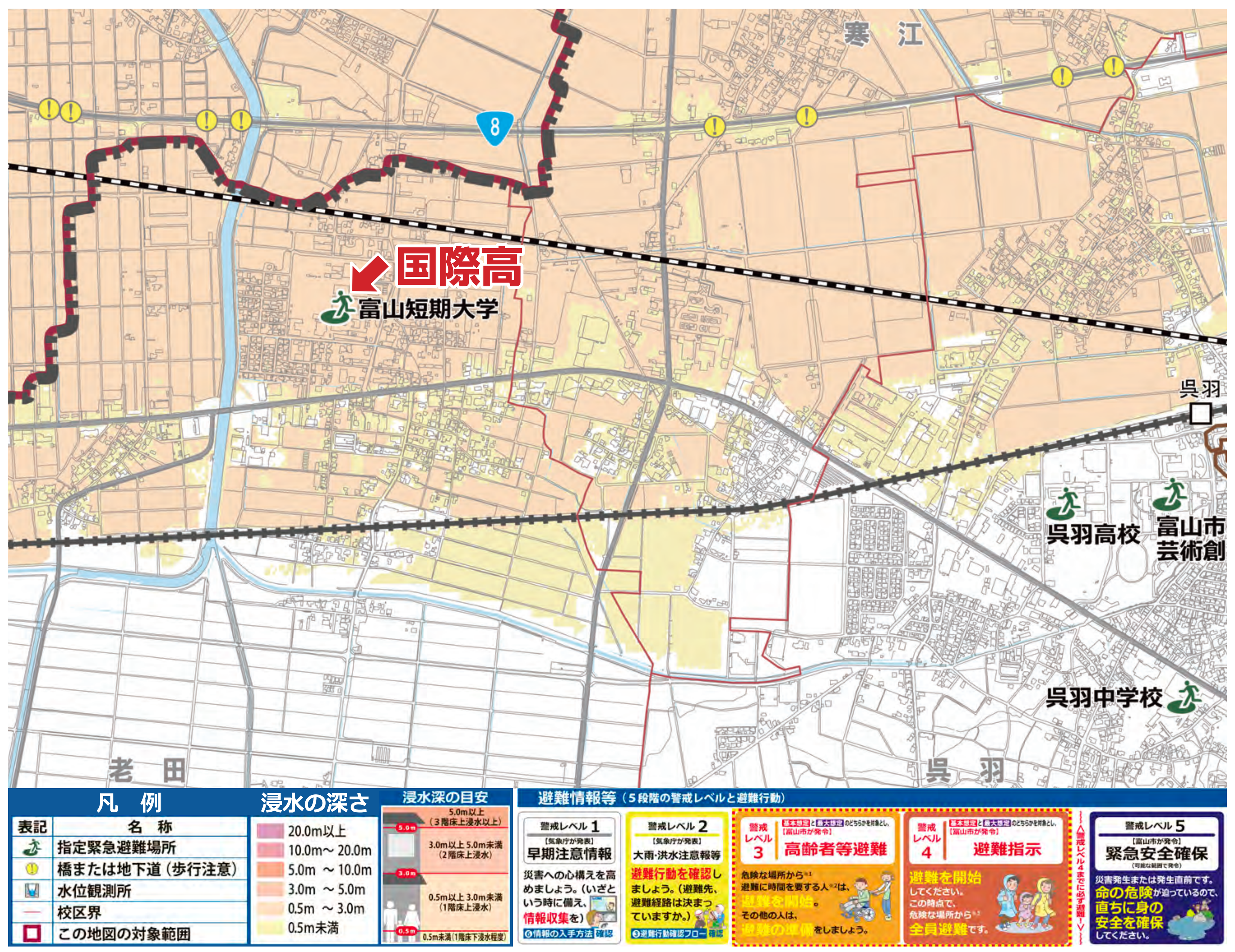
水害

今年8月、氷見市を襲った水害から2カ月が経つ。県西部に発生した線状降水帯により「観測史上初」という記録的な大雨が降り続き、広範囲にわたって浸水被害が発生。自宅が被災したり、ＪＲが運休になりしばらく登校できなかった国際生もいた。

さらに、あの能登半島地震から2年10カ月。各地にまだ影響が残る。想定を上回るような大規模水害や地震が、いつどこに起きてもおかしくないのが現実になりつつある。私たちは、いざという時の備えができているのか、「その時」が来たらどうするべきなのか。徹底的に追った。

国際高付近の 洪水 ハザードマップ

（富山市公式ウェブサイトより）



国際生アンケート

「ハザードマップ見たことがない」4割 避難場所は把握8割

県内では8月27日の記録的な大雨により、河川の氾濫や道路の冠水、土砂崩れなどが相次いだ。新聞部では9月、全校生徒を対象に防災への意識調査を実施した。有効回答数は757人。

Q1．自宅の地域のハザードマップを確認したことがありますか？

全校で、「紙で見た」は26・1%、「ネットで見た」は31・6%、「見たことがない」と回答した生徒は42・3%だった。災害が起きる前に、事前の確認が必要だ。紙が家になくても市町村のホームページで公開されているので、是非見てみよう。

Q2．災害時に自宅から避難する場合、行くべき避難場所を把握していますか？

全校で、「はい」は79・9%、「いいえ」が19・9%だった。約8割の生徒が避難場所を把握していることがわかった。

Q3．家族が離れている時に災害が起こった場合、避難方法や経路を話し合っていますか？

全校で、「はい」は28・6%、「いいえ」が71・0%だった。学年間で大きな差はなく、話し合っていると答えた生徒は3割に満たなかった。もっと防災意識を高めることが必要だ。

Q4．日頃、災害への備えを用意していますか？

全校で、「はい」は32・7%、「いいえ」が62・9%だった。「はい」と回答した生徒が挙げた備えとして、水、食料品、充電器などがあった。しかし、全体としては約3割の生徒しか備えておらず、十分な準備ができていない家が多いことが分かった。

Q5．家で地震の対策をしていますか？

全校で、「はい」は22・0%、「いいえ」が73・1%だった。「はい」と答えた生徒が挙げた対策として、「家具を固定する」「高い位置に物を置かない」などという回答が見られた。

Q6．防災のために心がけていることは？

「食料の備蓄」、「避難訓練に真面目に取り組む」といった事前の準備や、「避難所の確認」、「情報の素早い入手」という災害時に適切な行動をするための行動が挙げられた。

Q7．①2024年1月1日に能登半島地震が起こった時、どこで何をしていましたか？

今の国際生は当時、中学校1～3年生の冬だった。元日だったこともあり、最も多かったのは自宅や親戚の家で、家族との団らん中だった。次いで、商業施設で買い物中だったり、初詣の最中だったりという人が多くみられた。

②その時、避難しましたか？その場合、誰と、何を持って、どこに避難しましたか？

全校で、「避難した」は24・7%、「避難していない」は66・9%だった。2割以上の人が家族や親戚と避難をしていたことがわかった。その際、スマホなど最低限の必需品だけを持って避難した人が圧倒的多数。避難先は公共施設が多かったが、友達や親戚の家に避難した生徒もいた。

Q8．今年8月の豪雨で身の回りに被害はありましたか？その際、避難はしましたか？

全校で、「被害あり」は3・0%、「被害なし」が94・8%だった。被害の内容として、浸水や停電、家具の破損などが挙げられた。避難した生徒は見受けられなかった。

Q9．学校の避難訓練には真面目に取り組んでいますか？

全校で、「はい」は90・2%、「いいえ」が8・5%と、大多数の人は真剣に取り組んでいるようだ。しっかり取り組み、学校全体で防災についての意識を高めていくべきだ。

Q10．地域の避難訓練に参加したことはありますか？

全校で、「はい」は13・9%、「いいえ」が84・8%だった。積極的に地域の方々と関わり、いざという時に助け合える関係を作ることが大切だ。

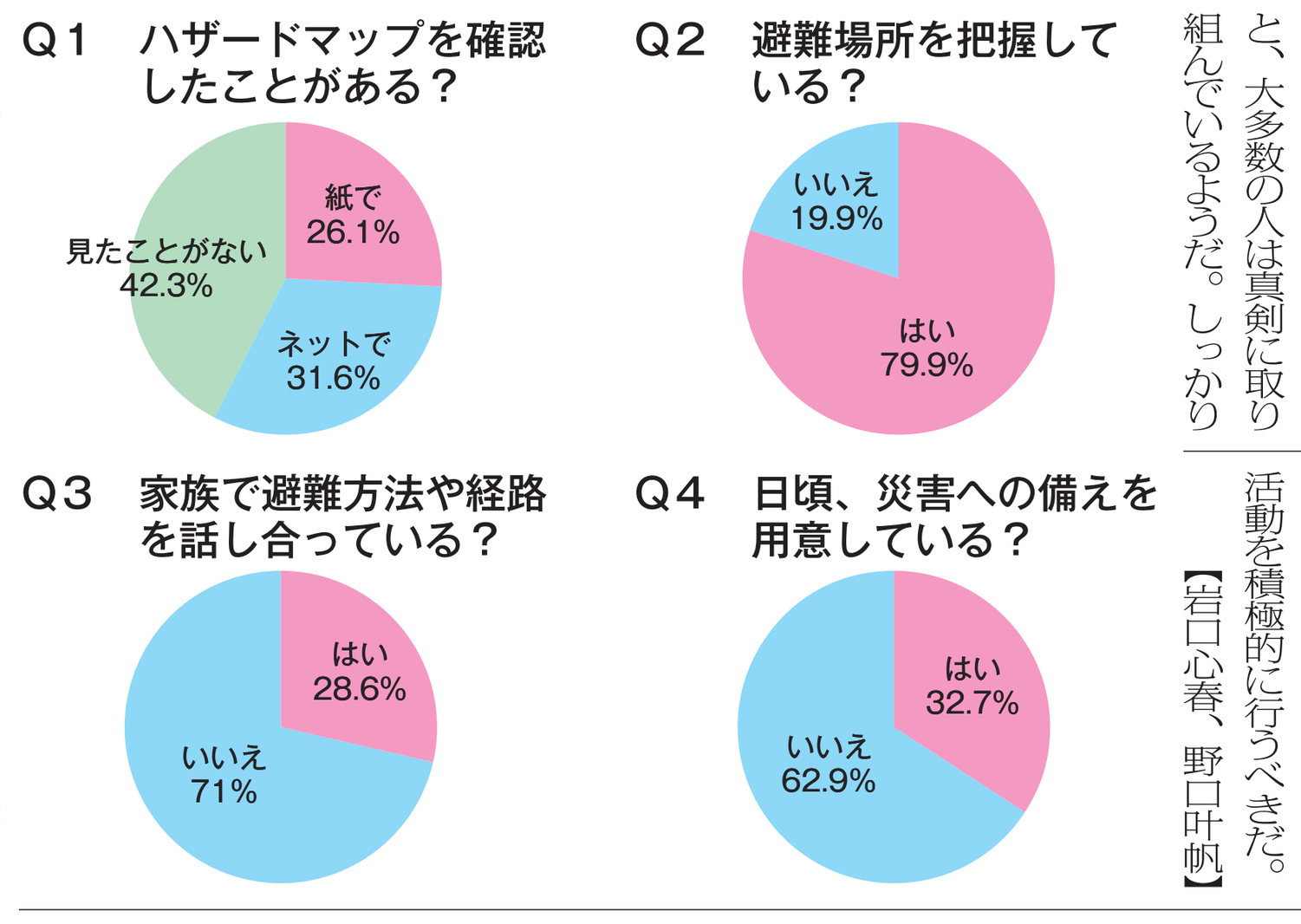
Q11．防災に関する授業や研修などを受けたことがありますか？

全校で、「はい」は62・2%、「いいえ」が32・1%だった。防災に関する授業や研修の機会を増やしていくことで、国際生の意識をより高めていけるのではないか。

Q12．高校生ができる防災活動には何があると思いますか？

最も多かった回答は「防災について知る」、「正しい情報を得る」。次いで、「避難場所の確認をする」といった回答だった。高校生ができる防災活動を積極的に行うべきだ。

【岩口心春、野口叶帆】



能登半島地震から2年10カ月

「あの日」の行動とこれからの備え

2024年1月1日に発生した能登半島地震から2年と10カ月が経とうとしている。あの日、私たちはどこで何をして、どのように行動したのだろうか。生徒へのアンケートを通して、当時の行動を振り返り、これからの災害への備えについて考えた。

2024年1月1日16時10分、石川県能登地方を震源とする最大震度7の「令和6年能登半島地震」が発生した。マグニチュード7・6の大きな地震で、石川県を中心に、富山県を含む広い地域で大きな被害が生じた。地震発生から2年10カ月が経った今、当時の行動を振り返り、今後の備えにつなげる取り組みが求められている。

地震が起きた時にしていたこととして多かったのは、「テレビを見ていた」「スマートフォンを触っていた」「家族と過ごしていた」「食事をしていた」「寝ていた」など、普段と変わらない生活を送っていたという回答だった。また、「買い物中だった」「旅行中だった」「車で移動中だった」という回答もあった。年始だったこともあり、初詣に行っている人も少なくなかった。

生徒アンケートの結果によると、地震発生時に避難した人の割合は、1年生が約3割、2、3年生は2割となり、当時は中1だった1年生の方が高かった。避難場所については、親戚の家、学校、山や高台、避難所、ホテル、商業施設など、さまざまな場所が挙げられた。

避難する際に持っていったものとしては、スマートフォン、食料、水、財布やお金、貴重品、毛布、防災グッズ、薬、ペットなどが多く挙げられた。一方で、「特に何も持たなかった」という回答もあり、突然の災害時には、普段から準備していなければ必要な物をすぐに持ち出すことが難しいという現実も浮き彫りとなった。

過去の経験を未来の備えへ

「地震が起きたら避難する」という単純な行動だけでなく、その時にどこに誰といて、何を持っているかによって行動が変わることも見えてきた。災害は自宅だけでなく、学校、外出先、旅行先など、さまざまな場所で起こる可能性がある。そのため、普段からさまざまな状況を想定し、それぞれの場面でどのように行動するかを考えておくことが重要だ。

能登半島地震から時間が経った今だからこそ、当時の行動を振り返ることには大きな意味がある。今回のアンケートをきっかけに、家族との連絡方法や避難場所を確認したり、非常持ち出し袋に必要なものを準備したりするなど、「もし今日、地震が起きたら自分はどうするか」を考えておくことが大切だ。過去の経験を振り返ることを、これからの災害への備えにつなげていきたい。

【松本悠希、リャガス レネ エイドリアン オソリオ】



本校体育館に近隣の方が避難していた（2024年1月1日17時頃、撮影）

県内の水害リスクとどう向き合うか

富山県立大学・呉教授に聞く

新聞部は9月11日、今回の水害を受け、水害の特徴や災害時の避難方法について富山県立大学工学部環境・社会基盤工学科の呉修一教授（土木工学、水文学、河川工学、防災水工学）から話を聞いた。



分かりやすく語る呉教授＝富山県立大

氷見市を襲った水害と「バックウォーター現象」

今回の氷見市の水害の特徴として、呉教授は、線状降水帯による想定を超える大雨と、氷見特有の低く平らでお椀のような地形が重なったことが大きな特徴と説明した。山から多くの水が集まってきた一方、平地では水が流れにくくなり、今回の大洪水が発生した。その要因の一つとして挙げられたのが「バックウォーター現象」。大雨で本流のような大きな川の水位が上がった際、支流のような小さな川の水が本流に流れ込めなくなり、行き場を失って逆流や氾濫を引き起こす現象だ。

近年、富山県でも線状降水帯が発生するようになった背景には、地球温暖化による気温上昇がある。気温が高くなると海からの蒸発量が増え、空気中に含まれる水蒸気も増えるため、これまでより大雨が降りやすくなる。

また、都市部は地方よりアスファルトやコンクリートが多く、雨が地面に染み込みにくいため、水害が起こりやすいとされている。一方で、都市部では排水設備などの対策も進んでいるため、「都市だから必ず水害が起こるというわけではない。水害が起こりやすい環境である一方、さまざまな対策によって被害を抑えている」と呉教授は語った。

富山県はもともと大きな河川や山が多く、洪水や土砂災害のリスクが高い地域だ。さらに今後は気候変動によって大雨が増える可能性があり、河川整備だけでなく、災害後に早く復旧できる「レジリエンス（災害への強さ・しなやかさ）」を高めることも重要になる。

災害の復旧にどれほどの時間がかかるかについては、「早ければ1～3日で復旧する場合があるが、場合によっては一生元の状態に戻らない」と語った。そうした事態を防ぐためにも、事前に対策を準備しておくことが大事だと説明した。

呉教授は、洪水時には無理に外へ出たり、車で避難したりするのは危険だと話した。また、状況によっては歩いて避難することも危険だという。冠水した道路では、マンホールや用水路が見えなくなる危険があり、車も水によって動かなくなる可能性があるためだ。他にも、避難する際には長靴の中に水が入り歩きにくくなるため、長靴を履くことも危険であり避けてほしいという。そのため、危険になる前に安全な場所へ避難することが大切だ。

自分の身は自分で守る

高校生には、まず自分の住んでいる地域や学校のハザードマップを確認し、家族や先生と避難方法を話し合うことが求められる。それだけでなく、災害や地球温暖化について学び、自分たちの勉強や活動が将来の防災や人の命を守ることにつながるという意識を持つことも大切だ。特に、メディアによる正確な情報発信は、災害時の避難行動を促し、人の命を救う力を持っている。

今後の富山県にどのような水害のリスクがあるのかについて、呉教授は「これから富山県内の水害リスクは段々高まっていくと思った方が良い」と話す。理由としては、地球温暖化により大雨（豪雨）のリスクが増加しているためだ。

国や県が河川整備などさまざまな対策を行っている一方で、地球温暖化によって大雨が増えることで、現在の河川整備などの対策がそのスピードに追いついていないという。「大きな河川は国が重点的に整備している一方、県が管理する中小河川は数が多く、すべてを整備することが難しい」と話した。そのため、今後は災害が起きても復興が早まるように、事前に対策を進めていくことが重要だと語った。

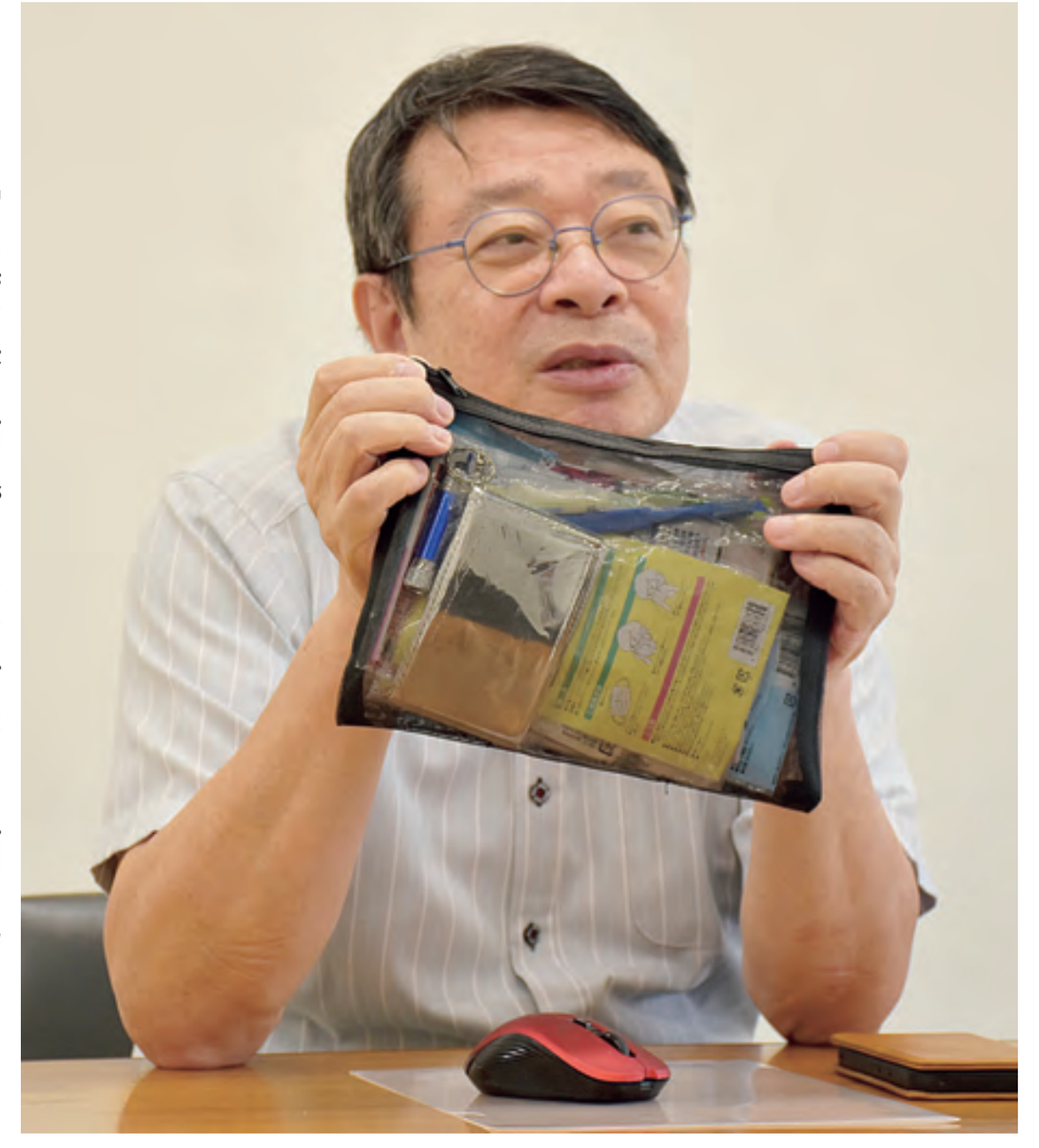
最後に呉教授は「高校生であっても、自分の身は自分で守る意識を持ってほしい。そして今後、人口が減少していく中で、どんな未来を描きたいのかを考えてくれたらうれしい」と話した。

【石黒星那、浦野未唯】

早めの避難と普段からの備えが命を守る

防災士・上田さんに聞く

8月27日、富山県内では各地で大雨による大きな被害が発生した。特に氷見市では被害が大きく、多くの避難所が開設され、避難生活を送る人もいた。今回、私たちは富山県防災士会の副理事長を務める上田司穂さんに、災害時の行動や防災について話を聞いた。



常に持ち歩く防災ポーチを手にする上田さん

命を守る「水平避難」

上田さんは、富山県の地形について「平野部が山と海の間に広がっているが、その幅が短く、傾斜していることが特徴」と語った。そのため、大雨が降った際には、土砂災害や河川の増水・氾濫に気をつけることが必要だという。

今回の水害で特に危険だと感じたこととして、土砂災害の危険がある地域で避難する人が少なかったことを指摘した。今回の水害時、富山市内でも土砂災害の危険性が高まった地域では避難指示が出され、避難所が開設された。しかし、避難指示が出されたにもかかわらず、実際に避難した人は少なかったという。

災害時、自宅にとどまることが危険な場合には、早めに「水平避難」をすることが重要になる。水平避難とは、災害の危険がない親戚や知人の家、ホテルなどへ移動することだ。災害が起きている地域では、電気や水道、ガスなどのライフラインが止まったり、物資が不足したりする可能性があるため、被害のない地域へ避難することが重要だという。また、水平避難が難しい場合には、学校や体育館などの避難所へ避難するという選択肢もある。上田さんは「災害が起きてからではなく、平時から自分の住んでいる場所の危険性や避難先を確認し、早めに行動できるようにしておくことが重要」だと語った。

上田さんは、日頃から持ち歩く「防災ポーチ」を紹介してくれた。上田さんの防災ポーチには、アルミブランケットやマスク、携帯トイレ、バンダナ、歯ブラシ、ホイッスル、ミニライトなどを入れているという。これらは、災害によって帰宅できなくなった際などに、雨風をしのげる場所で一晩過ごすことを想定したものだ。かさばらないため持ち運びやすいことも利点として挙げていた。

想定にとらわれず、最善を

上田さんは、若い世代が防災に興味を持つためには、実際の災害現場を知ることが大切だと話した。被災地でのボランティアなどを通して、災害が自分にも起こり得ることや、被災することの大変さを実際に知ることで、防災への関心につながるという。

また、過去の災害の「良好事例」から学ぶことも重要だと語った。上田さんは例として、「釜石の奇跡」と言われる東日本大震災の際の岩手県釜石市での出来事を挙げた。当時、日頃から防災教育を受けていた中学生が、想定されていた避難所にとどまらず、自ら判断して高台へ避難した。その行動が小学生や地域住民の避難にもつながり、多くの命が救われたという事例だ。

この事例から上田さんは、「想定にとらわれない」「その時の最善を尽くす」「率先して避難する」という考え方が重要だと説明した。また、「ハザードマップは安心マップではありません」と強調。実際、今回の氷見市のケースでも洪水ハザードマップの見直しに向け県が調査を行うことになっており、近年の災害は以前の想定を十分に上回っているのが実状だ。今のハザードマップで危険とされていない場所でも安全とは限らないため、状況に応じて自分で判断し、早めに避難することが大切、と話していた。

【浦野未唯】

体験で学ぶ災害の危険と備え

四季防災館に聞く

新聞部は9月27日、富山市のALSOKとやま四季防災館を訪れ、災害の危険性や日頃からの備えについて学んだ。館内で地震や水害、火災などを体験したほか、職員の大場啓治さんに話を聞き、災害時に取るべき行動について考えた。



震度7まで体験できる地震体験コーナー



水害コーナー。水深50センチでもドアはなかなか開かない

震度7の衝撃と水圧実感

地震体験コーナーでは、震度1から7までの9種類の揺れを体験した。阪神・淡路大震災、熊本地震、能登半島地震で実際に起きた揺れも再現されていた。震度6強では立っていることが困難になり、固定していない家具が移動したり、倒れたりすることがあるという。さらに震度7では、揺れに体を翻弄され、思うように動くことができないほどの激しい揺れを体感した。こうした地震の揺れについて、大場さんは「地震は台風や大雨と違って予報がないため、いつ起きるか分からないと説明した。いつ起こるか分からないからこそ、地域の活断層による地震の発生確率などを知り、普段から頭に入れておくことが大切だという。

水害コーナーでは、水没した車のドアを開ける体験をした。水深は30センチ・50センチ・90センチの3段階で、それぞれ約10キロ・30キロ・240キロの水圧がかかる。30センチでは男女ともに開けることができたが、50センチでは子どもが苦戦し、90センチではほとんどの人が開けることができなかった。水害時の脱出に備え、車内にハンマーなどを用意しておくことが大切であり、代替品としてボールペンや車のヘッドレストなども使えるという。

煙体験では、煙が立ち込めた暗い室内を、誘導灯に従って出口まで進んだ。煙で視界が悪く、避難する方向を確認しながら進む難しさを体験した。火災直後は、熱い煙が上にたまり、床付近には比較的きれいな空気が残る「中性帯」ができるという。慌てて走ったり激しく動いたりすると煙がかき混ぜられ、床付近まで降りてくるため、落ち着いて避難することが大切だと教わった。

ハザードマップ活用と家族との事前共有

こうしたさまざまな災害がある中で、実際に災害が起きたとき、どのように行動すればよいのか大場さんに話を聞いたところ、ハザードマップなどを見て避難経路を覚えておくことが大切だという。しかし、ハザードマップは避難経路などを考える際に役立つ一方、過去の災害をもとに作られているため、これまでに起きていない想定外の災害までは記されていない。ハザードマップを参考にしながらも、想定外の事態が起こる可能性を考えておくことも大切だと話した。

また、災害時に家族とどこで待ち合わせるか、どのように連絡を取るかを事前に話し合い、家庭内で情報を共有しておくことも必要だという。避難場所は一つだけでなく、状況に応じて段階的に避難できる場所を確認しておくことも重要だと話した。高校生でも、こうした家族との話し合いや家具の転倒防止など、身近なところから防災対策をすることができるという。

近頃、高校生など若い世代の来館者は増えているという。特に近隣で災害が起きた直後には増える傾向にあるという。大場さんは、若い世代が防災意識を高めるには実際に災害を体験することが大切で、こうした体験コーナーなどを通して災害の危険性を知ってほしいと話す。また、いつ災害が起こるか分からないからこそ、日頃から災害に興味を持ち、ニュースなどを通して自分の地域で起こる可能性のある災害について知っておいてほしいと話した。

【福光由彩】

その時、どうする？



地震や大雨による水害は、いつ、どこで起こるか分からない。今回、取材を通して、「学校」「家」「外（登下校中）」の三つの場所で被災した場合を想定して、災害への備えと、いざというときに取るべき行動を考えた。

（上の写真は、10月のシェイクアウト訓練の様子。机の脚をしっかり握っているのが正解）

学校にいる時 まずは身の安全確保

学校にいる時に水害が起きた（起きると想定される）場合、大雨の中を無理に登校したり、帰宅したりすることは危険だ。学校周辺の道路が冠水すると、マンホールや用水路などが見えなくなり、歩いて帰宅することは極めて危険になる。また、車での避難も安全とは限らず、道路が冠水している場合、車が動かなくなったり、水に流されてしまう可能性もある。学校の中でも、グラウンドや体育館など低い場所は浸水する可能性があるため、状況によってはより安全な上の階へ移動することが大切だ。

地震が起きた場合は、まずは机の下に入るなどして頭を守り、揺れが収まるまで落ち着いて行動することが大切だ。地震直後に帰宅しようとすると、倒壊した建物や道路など、別の危険に遭遇する可能性がある。揺れが収まっても、周囲の状況を確認し、自分の身の安全を確保して行動することが重要だ。

いずれの場合も、先生や家庭ともしっかり連絡を取ることが必要だ。

家にいる時 物よりも自分の身守って

家にいるときに水害が起きた場合、必ずしも避難場所へ行くことだけが避難ではない。外へ出ることが危険な場合は、自宅の上階など、安全を確保できる場所へ移動することも避難の選択肢の一つになる。そのため、普段から洪水ハザードマップを確認して、家族と避難場所や避難方法について話し合っておく必要がある。

地震が起きた場合、家具の転倒や物の落下から身を守ることが最優先だ。普段から、家具を固定しておくなど事前に地震対策をしておくことも重要だ。取材では、「物を支える時間があったら、自分の身を守って」という話を聞いた。災害時には、目の前の物を守るのではなく、その状況で自分の身を守るためにできる「最善」を選ぶことが大切だ。

登下校中 事前に避難場所の把握を

登下校中に水害が起きた場合、今いる場所が安全かどうかを判断する必要がある。取材では、「今いる場所は、河川の氾濫や津波の恐れがある場所なのかを確認することが重要」という話を聞いた。普段から自宅や学校だけでなく、登下校で通る道路などが入っているハザードマップを確認しておく必要がある。危険が迫ってからではなく、危険になる前に安全な場所へ避難することが大切である。

地震が起きた場合、自宅や学校とは違い、すぐに安全な場所へ避難できるとは限らない。まずは、周囲に危険なものはないかを確認し、倒壊しそうな建物や落下物などから離れるなど、自分の身の安全を確保することが重要だ。

そして、登下校のルート付近にある避難場所も確認しておこう。今回の生徒アンケートでも、自宅からの避難場所は把握している人が多かった一方、家族と離れている時にどこへ避難するかを把握している人は少なかった。災害はいつ、どこにいる時に起こるかわからない。登下校中に災害が起きた場合に備え、その時の避難場所についても家族と話し合っておくことが必要になる。

【浦野未唯、石黒星那】

まとめ 災害を「自分事」として捉え 未来の命守ろう

身近なリスクとしての自然災害

2026年8月27日、氷見市を中心に線状降水帯が発生し、気象庁から富山県内で初めてとなる大雨特別警報（警戒レベル5）が発表された。防災科学技術研究所の解析では「1000年に一度レベル」を超える極めてまれな記録的豪雨と判明し、河川の氾濫や土砂崩れなどにより800棟を超える住宅が浸水するなど深刻な被害が発生した。さらに、2024年には隣県の石川県能登半島で大地震が発生し、大きな被害が出た。専門家ですら予想できなかった今回の水害、そして能登半島地震を通して、私たちにとって災害は決して遠い存在ではなく、とても身近に起こり得るものだと改めて感じたのではないだろうか。

災害から時間が経った今でも、復興に向けた作業や支援が続いている。また、避難を余儀なくされ、現在も避難生活を続けている被災者もいる。能登半島地震からの復興途上における「二重の被災」となった地域もあり、深刻な影響が残っている。災害は発生した後の生活に長く影響を及ぼし、場合によっては元の生活に戻れなくなる可能性もある。だからこそ、被害を少しでも減らすための備えが重要なのだ。

では、私たちは災害に備えて何ができるのだろうか。そこで重要になるのが「防災」。防災とは、地震や台風などの自然災害による被害を未然に防いだり、できるだけ小さくしたりするための備えや行動のことだ。防災というと、非常食や防災グッズを準備することを思い浮かべる人も多いだろう。しかし、それだけではなく、避難場所や避難経路を確認したり、災害時にどのような行動をとるかを事前に考えたりすることも防災の一つだ。

高校生にできるアクションと学校への提案

例えば、ハザードマップを確認したり、避難場所や避難経路を調べたりするなど、私たち高校生にもできることは多くある。ほかにも、防災グッズや非常食を準備したり、家族と災害時の連絡方法を決めておいたりすることも大切だ。家の周辺だけではなく、通学路や学校の周辺にどのような危険があるのかを知っておくことも重要になる。このような備えをしていくことが、自分や周りの人の命を守ることにつながるのではないだろうか。

では、学校としてできる防災にはどのようなものがあるだろうか。新聞部は、学校で行われている避難訓練を「予告なし」で行い、実際の災害を想定した訓練を取り入れることを提案する。また、災害は「想定通り」に起こるとは限らないため、普段からさまざまな状況を想定することが大切だ。例えば、先生が近くにいない場合や、想定していた避難経路が使えなくなった場合を想定することで、自分で考え、判断し、行動する力を身につけられるのではないだろうか。

さらに、防災に関する講習会などを行うことで、災害への意識を高め、知識を身につけていくことも重要だ。災害は決して他人事ではなく、自分自身にも起こり得るものだという意識を持つことが、日頃の備えにつながるだろう。

このように、防災は日常生活の中でできる小さな行動の積み重ねだ。「想定にとらわれない」「その時の最善を尽くす」「率先して避難する」という考え方を持つことが重要だ。ハザードマップで危険とされていない場所でも安全とは限らないため、実際に災害が起きたときに、自分で状況を判断して行動することも必要になる。高校生であっても、自分の命を守ることだけではなく、周囲の人に声をかけたり、避難を促したりすることができるだろう。防災を他人事のように思うのではなく、自分事であると捉え、防災への意識を高めていくことが大切なのではないだろうか。

【浦野未唯】

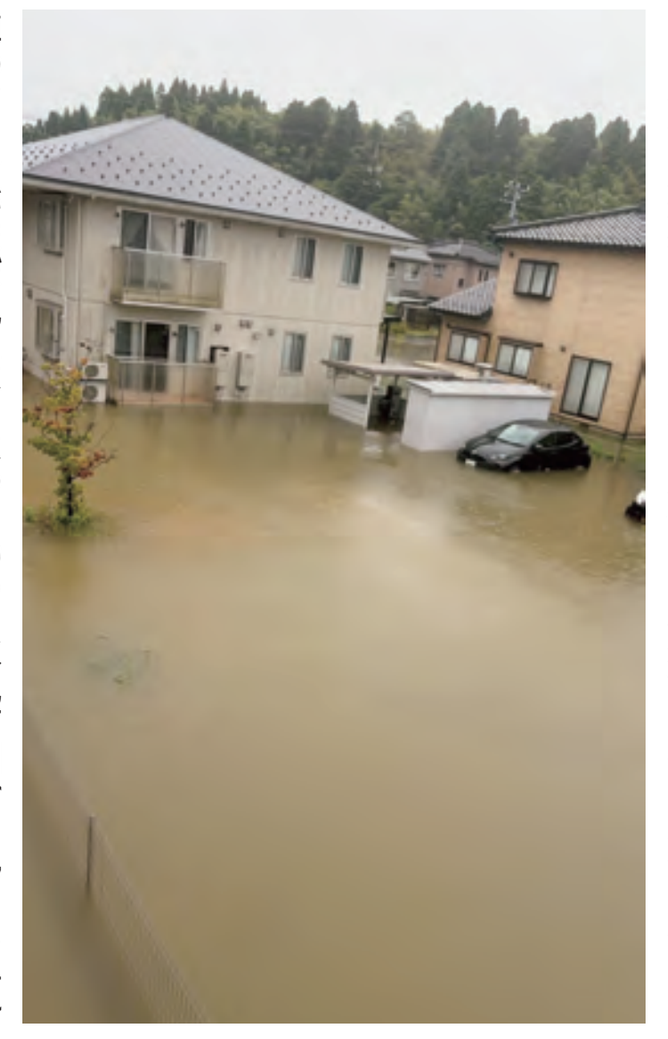


今年から本校の避難訓練に導入された「煙中体験」

氷見の水害から学ぶ

被災生徒4人の実体験

8月27日からの記録的大雨により、氷見市では河川の増水や道路の冠水、住宅への浸水（床上182棟、床下357棟）、土砂崩れなどの被害が広範囲で発生した。被害を受けた住宅などでは、現在も修理などの支援が進められている。



車のタイヤがほぼ見えなくなっている＝氷見市園（8月27日夕方）



ボートで移動＝氷見市園（8月28日夕方）

強まった「事前の備え」への意識

今回の水害について、新聞部は実際に被害に遭った氷見市在住の3年生4人を対象に聞き取り調査を行った。人の膝上くらいまで水位が上がったという園地区に住む定塚流音さん（32H）の家は、床下浸水の被害を受けた。当時は家に家族といたが、「命の危険はない」と判断し家の外には避難しなかったそうだ。掲載した写真は、全て定塚さんから提供してもらった8月27～29日の園地区の様子だ。住宅街まで水が流れ込んで湖のようになっており、道路も完全に冠水。車のタイヤもほとんど見えなくなっているのが分かる。

他の3人は自宅そのものに被害がなかったが、その時は家の中で家族と一緒に状況を見ていたり、家の外に避難したりと、それぞれ異なる対応をしていた。

友人の家に避難したと答えたのは、海沿いの南大町に住む關野沙弥さん（31H）。近くの川の水位を見て、避難を決断したそうだ。

一方、避難しなかった人は、家の周辺などの状況を見ながら避難するかどうかを判断していた。やはり海沿いで南大町に隣接する地蔵町に住む松本昇さん（32H）は、家の周辺を流れる川の氾濫や洪水の状況を確認し、「自分の家には大きな被害は出ない」と判断したという。また、山あいの粟原地区に住む西森麻葉さん（35H）も「周りの状況を見て」判断したと回答した。

しかし、今回の豪雨を経験したことで、災害が起きたときに状況を見て判断するだけではなく、普段から備えておくことの大切さも見えてきた。松本さんは「水害を甘く見ず、冷静かつ的確な判断ができるようにしたい」と答え、西森さんは「日常から準備をしておく」と回答した。避難した關野さんは「災害に備えて、いつでも避難できるように家族と話し合う。自宅の土地の高さを調べておくことも必要」と答えている。



特別警報下のリアルな心理

今回の経験をふまえ、家族と災害について話すことが増えたかという質問で唯一「はい」と答えたのはやはり定塚さん。実際に床下浸水という被害を経験したことで、家族で災害について考えるきっかけになったことがうかがえる。

8月27日午前6時20分、「警戒レベル5の大雨特別警報」が出される。これは、災害が発生または切迫し、すでに安全な避難ができず、命が危険な状況にあることを示す情報だ。この時の状況について、定塚さんは「冷や冷やドキドキした」と率直に振り返る。松本さんは「浸水の恐怖を感じた。被害拡大は防ぎたい」という心境だったそうだ。西森さんは「やばいと思ったけれど、よく分からなかった」、さらに關野さんは「ここまで大事になると思っていなかった」と、災害の大きさを感じながらも、具体的に何をすればよいのか分からなかったり、ここまでとは想像できなかったりという、これまで経験のない大雨の中で周囲の状況を確認しながら避難の必要性を判断することの難しさも浮き彫りとなった。

今回の聞き取り調査では、実際に被災した生徒だからこそ感じた不安や、避難の判断、今後の備えについての考えが明らかになった。定塚さんは「事前に対策としてできたことは特になかったと思う」と答えたが、だからこそ「（いろいろ想定した上で）事前準備をもっとするべき」と話している。松本さんは「地震も同じだが、水害も思いがけないタイミングで発生する。大雨のように予想ができているものでも想像以上に凄いことになることがあるため、災害に対する事前情報をしっかりと入れ、対応できるようにする」ことが必要と強調していた。

8月に氷見市などを襲った記録的大雨による被害を経験した生徒4人の声からは、災害が起きてから慌てて行動するのではなく、普段から避難について考え、家族と話し合ったり事前の備えをしておいたりすることの重要性が改めて示されたと言える。

【林琴葉】

もしも大地震が起こったら…

校内徹底チェック！

地震発生時、校内のどこにいるかで取るべき避難行動や注意すべき危険は異なる。校内の場所ごとのリスクを把握し、日頃から安全管理と防災意識を高めることが求められる。

そこで新聞部は、もし大きな地震が起こった時に校内のどこかにいたらどうすべきか、徹底チェックした。

国際高校舎の耐震性能は、場所によって異なる。本館・東館は震度6強まで耐えることができるが、築年数が古い光彩館や明窓会館は6強までは耐えられないそうだ。

新聞部は、2012年3月発行の「新校舎竣工記念号外」で「昨年2月に完成した本館、今年2月に出来たばかりの東館ともに、（中略）震度6強の地震で倒壊、崩壊せず、震度5強程度の地震では損傷もしないという堅固な耐震性能を備える安心・安全な建物」と紹介している。ただし、想定は基本的に大丈夫ということで、被害が0ということではない。

【教室】

身を隠すことができる机は多いが、大きな窓があるため災害時には近づかないようにすることが重要だ。また、天井のプロジェクターなどが落ちてくる可能性があるため、注意する必要がある。扉がふさがれてしまうと逃げ遅れてしまうという危険もある。

【廊下】

身を隠す机などがなく、窓ガラスの割れやロッカーなどの落下・転倒の危険がある。地震発生時は窓や壁際から離れ、カバンなどで頭を保護しながら低く身構えることが重要。また、避難の妨げにならないよう、日頃から廊下に荷物を置かないなど、安全管理が求められる。

面談用の白い机が各教室の前にあるが、キャスターはロックしておかないと飛び出してくるかも知れない。

【階段】

基本的に危険物はないが、地震が起きた時に階段の途中にいる場合は、その場にしゃがみ揺れがおさまるのを待とう。揺れている間は、慌てて階段の昇り降りはしない。踊り場にいる場合は、窓ガラスからできるだけ離れよう。

【エントランス】

エントランスは出入口があるため安全な場所だと思われるが、標高が低い場所であるため津波が想定される場合、上の階へ避難するなど早く行動することがより重要となってくる。また、カップやトロフィー、大きな額に入っている美術作品などの展示品が並んでいるため、落下物には十分に注意する必要がある。

【情報室】

大きなパソコンが倒れてくるかも知れない。机の下に潜って、まずは身の安全を確保するべきだ。コードなどが多くあるので、電気が復旧した時に傷ついたコードがショートする通電火災を防ぐため、揺れが収まったらケーブルからコードを抜いて出火を防止することも必要だ。

【図書室】

本棚の転倒や、本棚から落下してくる本はかなり危険。落ち着いて机の下に潜って頭を守る必要がある。本棚が密集しているスペースから素早く離れ、開けた場所に速やかに逃げよう。

【化学室・理科室】

薬品やビーカーなどが落ちて割れるといった、外傷になりやすいものが多くあるため危険。しかし、大きな机が多くあるため頭などは守ることができる。火災が発生する可能性があるため、要注意だ。

【体育館】

上からの落下物や窓ガラスの破損を避けるため、中央部に集まり低い姿勢をとることが推奨されている。また、用具棚などが置いてある所ではその場から離れ、低姿勢になり頭を隠すことが必要だ。

【グラウンド】

良くも悪くも周辺に何もないので、基本的には火災などの災害時には避難する場所として最適。端側で周りを囲っている支柱やフェンスが倒れてくると危ないので、中心側に避難する方がよい。

【トイレ】

閉じ込められて避難できなくならないようにドアを開け、頭の上に注意しながらすぐ逃げられるようにしよう。危険は少ないものの、つかまることのできる取っ手などは少なく、危ない。長時間いる場所ではないので、用が済んだら出て、滞在時間を短くすることが日頃から大切。また、窓ガラスや鏡は割れる危険があるので、非常時には近づかないようにしたい。

【宗友大地、砂田陽向】

国際高 文化活動

この秋も活躍！

金村さん（22H）全国大会出場

学生ユネスコ弁論大会　本校生徒が1～3位

国際理解や国際協力をテーマとした第74回学生ユネスコ弁論大会（富山ユネスコ協会、県ユネスコ連絡協議会主催）が9月26日、富山電気ビルで行われ、本校生5人が出場して高校生の部で1～3位を獲得した。



入賞した本校メンバー。金村さんは中央＝富山電気ビル

金村有紗さん（22H）が1位、山下結莉さん（23H）と新井彩生さん（24H）が2位、尾山凛さん（23H）と志甫薫乃さん（11H）が3位だった。また、新井さんは「富山湾クラブ賞」も受賞した。

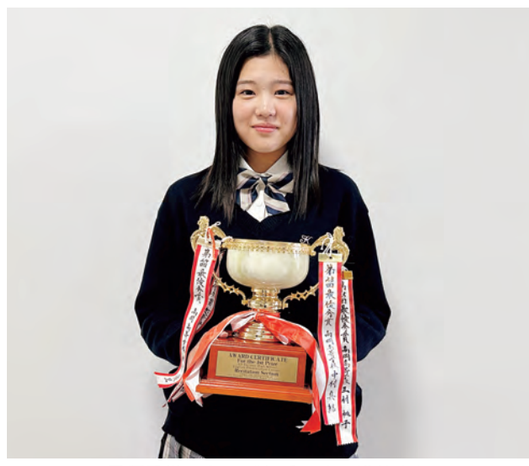
この大会は「第73回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」の県代表者選考を兼ねており、金村さんは県代表として、10月26日に東京の国連大学で行われた全国大会に出場した。

日本とアメリカにルーツを持つ金村さんは、「生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて～未来のための対話を～」というテーマで6分間の主張を展開。「私たち高校生も異なる意見に耳を傾け、歴史や文化を学び、自分の偏見を問い直すことができる。わかり合えないからこそ対話し、過去の対立を未来の対話へと変えていくことで、誰もが自分らしく生きられる社会を築いていきたい」と述べた。

当日は「これまでの努力を発揮でき、今までで一番の弁論になったと思う。審査員や聞いている方々に伝えたいという思いから、意識通りに言葉の強弱をつけられた」と振り返る。「今後も様々な場面で自分の思いを発信できるようになりたい」と話していた。

松井さん（11H）
レシテーション（暗唱）最優秀賞
県英語プレゼンコンテスト

県内の高校生が英語でスピーチやプレゼンテーションを行い、表現力や情報の活用能力などを競い合う第27回県高校生英語プレゼンテーションコンテスト2026が10月17日、富山市民プラザで開かれ、指定された英文を暗唱するレシテーション部門で、松井彩吹さん（11H）が最優秀賞に輝いた。


最優秀賞のカップを手にする松井さん

このコンテストは、英語によるプレゼンテーションを通して自分の意見を伝える力や情報を生かす能力を身につけてもらおうと毎年開かれており、今回、レシテーション部門にエントリーした参加者は28校の46人だった。

四つの課題の中からアマンダ・ゴーマンさんの詩「The Hill We Climb」の一節を選んだ松井さんは、夏休み明け頃から練習を開始。最初は正しく発音することも難しかったが、題材の動画を見ながら知らない単語を調べて発音や意味を覚え、放課後や自宅に帰ってから先生とオンラインでの練習を繰り返した。「うまくいかない時でも先生のポジティブな声かけのおかげで、最後まで諦めることなく練習を続けることができた」と振り返る。

当日は「いざ自分の番が来た時は緊張もせず、スムーズにステージに上がることができた。取り組んだものに自信があったからだと思う。練習の成果も出せたので後悔はなかった」と自己評価。見事、1位という結果に「驚きもあったが、私自身、英語がもっと楽しくなり自信になった。1カ月半ほど練習に携わってくれた先生方に感謝したい」と話した。

今後は「これに満足することなく、英語力をより向上させていきたい」と意気込む。

続・海外特派員通信
太知　ももさん（22H）From　ハンガリー
家族愛あふれるハンガリーでチャンス生かす

毎回好評の、海外留学中の国際英語コース生による「海外特派員通信」。代替わりの今回は、今年8月からハンガリー北東部のサボルチ・サトマール・ベレグ県に留学している太知ももさん（22H・新聞部員）に伝えてもらう。


8月、首都ブダペストの聖イシュトヴァーン大聖堂の中でホストシスターと（太知さんは左）

皆さん、Szasztok（ハンガリー語で「こんにちは」）！ハンガリー東部のサボルチ・サトマール・ベレグ県にあるアヤクに留学している太知ももです。アヤクは人口が3千人ほどの小さな街ですが、静かで落ち着いた良い街でもあります。

私は現在、アヤクの隣の街のキシュバールダにあるベッシェニェイ・ジェルジ・ハイスクールに通っています。授業は午前7時45分に始まり、早い時は午後12時15分、遅い時でも午後2時5分には終わります。1授業は45分間で、日本と同じように先生の話を聞いてノートを取るスタイルです。毎授業、クラスが変わるので、生徒たちはみんな自分のカバンを持って移動します。クラスには必ず一つ時計があります。クラスには必ず一つ時計がありますが、正確な時刻を示しているものを私は見たことがないので信用してはいけません。みんな腕時計でそれぞれ時間を確認しています。

終業時間が早いため、昼休みというものはなく、みんな授業の合間にそれぞれ持ってきたサンドウィッチなどの軽食を食べたり、学校の購買でファストフードなどを買ったりしています。家に帰ってからしっかりとした昼食を食べるため、たまに食べ過ぎていないか心配になります。私は、月曜日にアートクラブに行っており、午後2時半から4時、4時から場所を変えて7時まで、自分の作品と一生懸命に向き合っています。アートクラブの仲間と互いの作品を称え合ったり、お話ししながら絵を描く時間がとても好きです。

私のホストファミリーは、ホストファザー、ホストマザー、ホストシスターとゴールデンレトリーバーの可愛い犬が1匹の、3人と1匹暮らしをしています。

平日の放課後は、よく街を運動がてらに歩いたり、家でのんびりと絵を描いたり、ドラマを見たりなど好きなことをのびのびとしています。最近はホストマザーと一緒に話しながら、のんびり散歩をするのが好きです。

土曜日は、午前中にハンガリー語のレッスンをして、午後からはどこかに出かけたり、ショッピングをしたり、用事がなければみんなでお話ししたりして過ごします。日曜日の昼食の前には、家族みんなで祈りを捧げる習慣があると聞いたので、私もホストファミリーと一緒に毎週、祈りを捧げています。また、ホストファミリーが1週間に1回は家族と電話した方が良いと言うので、毎週日曜日は家族と1時間ほどビデオ通話をしています。ハンガリーの人たちはみんな、家族をとても大切に思っていて、素敵だなといつも感じます。

ハンガリーに来てから、もう2カ月が経とうとしています。生活にもだいぶん慣れてきて、そろそろ日本が恋しくなる頃かなと日々身構えています。この2カ月の間、とても多くの経験をして、楽しいことばかり、というわけではありませんでした。しかし、困難にぶつかっても自分で解決策を見出したり、時には助けを求めたりして、なんとか乗り越えてきた経験は、自分を成長させるとともに一生の財産になるだろうなと思います。幸運なことに、経験を積めるチャンスがまだあと8カ月もあります。日々を無駄にしないように、与えられたチャンスを取りこぼすことのないように、これからも頑張っていきたいと思います！

学生時代



高1　ひと夏の貴重な経験

紫　康徳（むらさき　やすのり）先生（理科）

写真は大学１年生の時、自宅の寺で門徒の方と法要の後片付けをしているところ（紫先生は右）

高校一年生の夏休み、私は坊主頭で京都にいた。僧侶の資格を取得するための研修だった。正直に言うと、まったく乗り気ではなかった。一体どんな人が集まるかも分からないし、そもそも「寺の後継者」という自分の立場にすら納得がいっていなかった。自分には人の生き死にを見届ける覚悟なんてない。そう思い続けていた私は、答えの出ない不安と重い足取りのまま、京都へ向かう電車に乗った。

京都の夏は、とにかく体に堪える暑さだった。朝は早朝からやけに癖になる宗教音楽で叩き起こされ、すぐに掃除、そして勤行（儀式やお経の練習）へと向かった。自由な時間などほとんどなく、次の授業に一秒でも遅れれば厳しい指導が入る緊張感。お経はとにかく長く、慣れない正座を延々と続けていると、畳の上に自分の形をした汗のしみができていた。後から振り返れば思わず笑ってしまうような光景だが、当時は余裕など微塵もなかった。

しかし、そんな大変な生活の中でも、少しずつ変化があった。空いた時間を見つけては、班のみんなでお経の練習をするようになった。というのも、課題を一つひとつ全員が合格しないと京都から帰らせてもらえないと聞いたからだ。お経を覚えられない人がいれば一緒に声を合わせて読む。音程が違っていたら直す。全国から集まった寺の後継者たちは、抱えている事情もさまざまだった。けれど、同じ困難を一緒に乗り越えていくうちに、年齢も生まれも違うのに、いつの間にか仲間になっていた。

夜になると、消灯時間を過ぎても話が止まらなかった。後継者ならではの重い悩みも来る前はあれほど嫌で、早く家に帰りたがっていたはずなのに、離れがたい寂しさがこみ上げてきた。

あれから十年が経つ。あのとき出会った仲間とは今もつながっている。滅多に会える距離ではないが、「きっとどこかで彼らも頑張っている」と思えるだけで、自分も頑張ろうと背中を押される。彼らは今でも、私にとってかけがえのない特別な存在だ。

覚悟のほうは、正直に言えば今もあまりない。荷が重いと感じる。誰かが亡くなったと聞けば深く悲しくなるし、自分に関わる全ての人に幸せで満足した人生を送ってほしいと思っているが、それも甘い考えだなと、ふと思う。だからこそ、代々受け継がれてきた大切な役目を、自分なりに丁寧に、心を込めて務めていきたいと思っている。

もし今、何かに踏み出せずにいる人がいたら、こう伝えたい。自分の環境や立場に納得がいかないまま始めることになっても、心配し過ぎずに、やってみたらいい。仲間ができるかもしれない。大事なのは心の持ちようだと思う。なんとかなる。きっとね。

伝統を力に　挑戦を誇りに　心を一つに　新たな歴史を



笹谷さん（14H）県高文祭テーマ標語で最優秀賞

11月6日から開幕する第38回県高校文化祭のテーマ標語に、笹谷桃華さん（14H）の「伝統を力に　挑戦を誇りに　心を一つに　新たな歴史を」が選ばれた。

国語の授業の一環として作ったこの標語が、241点の応募の中から見事に最優秀賞を射止めた。「県高文祭で38年という長い間に受け継がれてきた伝統を大切にしながら、それを力に変え、新しいことに挑戦してほしいという思いを込めた。また、多くの高校生が心を一つにして活動することで、新しい歴史を作ってほしいという願いも込めている」と話す笹谷さんは、受賞の知らせを聞き「とても驚いたが、県高文祭という大きな行事に自分の言葉が使われることに誇りを感じる。多くの人に、この標語に込めた思いを感じてもらえたらうれしい」と振り返る。

県高文祭については「参加する高校生にとって、これまでの努力を発表する場だけでなく、新しいことに挑戦するきっかけになってほしい。多くの高校生が集まり、お互いの作品や発表から刺激を受けられることも魅力だと思う。皆で心を一つにして、一生の思い出に残るような県高文祭になれば」と力強く話し、「自分は文化部員ではないが、今回の標語作りを通して文化部の活動や魅力を知るきっかけにもなり、文化部活動に関われたことをうれしく思う」と述べた。

笹谷さんは、11月7日の県高文祭開会式で表彰される。

部説
「タイパ」時代を生きる私たち
～効率の先にある「豊かさ」とは～

最近、「タイパ」という言葉を耳にすることが増えてきている。タイパとは「タイムパフォーマンス」の略で、かけた時間に対して得られる成果や満足度の高さを表す言葉だ。若い世代の間ではタイパを重視している人が増えてきている。

例えば、動画配信サービスのコンテンツを倍速で視聴したり、生成AIを活用して資料や文章の要約を作成したりすることが挙げられる。こうした行動が広まった背景としては、スマートフォンやSNSの普及によって、1日に受け取る情報量が大幅に増えたことがある。次々と流れてくる膨大な情報に触れる中で、「限られた時間を無駄にしたくない」「流行に取り残されたくない」という意識が、特に若い世代を中心に強まったと考えられる。

タイパを重視することには、様々なメリットがある。短時間で多くの情報を得られることや、無駄な作業を減らして重要な作業に時間を充てられることだ。

こうした工夫は、学習や仕事の効率を高めることだけでなく、生まれた余白の時間で新しい趣味や挑戦に充てられるなど、生活の可能性を広げることにもつながる。

一方で、デメリットもある。常に「時間を無駄にしてはいけない」と焦燥感に駆られ、心休まる暇がなくなる恐れがある。また、動画のダイジェストや文章の要約ばかりに頼ると、物事を深く考えたり、自分で応用したりする力が身につきにくくなる可能性もある。さらに、効率だけを求めすぎると、遠回りをしたからこそ得られる深い学びや、偶発的な発見といった「一見無駄に見える時間」の豊かさを見過ごしてしまう危険性もある。

では、私たちはタイパとどのように向き合っていくべきなのだろうか。大切なのは、自分自身で時間の使い方を意識することだ。例えば、何か行動を始める前に、「なぜこれをするのか?」「これによって何を得たいのか?」と自問自答する習慣を身につける。この問いかけをすることで、その行動にどれくらいの時間や労力をかけるべきか、判断しやすくなる。また、何でも効率よく済ませようとせず、あえて時間をかけて物事に取り組むことも大切だ。勉強では、すぐに答えや解説を見るのではなく、自分で考え、試行錯誤することで、より本質的な理解が深まることもある。さらに、友人との他愛もない会話や自分の効率に見える時間も、心を豊かにするためには欠かせない。時間を短縮することだけを目的にするのではなく、効率よく進めるべきことと、じっくり取り組むべきことを自分の軸で区別することが大切だ。

私たち高校生にとっても、タイパは身近な考え方の一つだ。勉強や部活動、趣味など、限られた時間の中でやりたいことを両立させるためには、時間を効率よく使う工夫が役立つ。一方で、効率を優先するあまり、時間をかけて深く学ぶことや、友人と語り合う時間の大切さを見失うのはよくないだろう。タイパはあくまで自分らしい時間を過ごすための「手段」であり、それ自体が「目的」になってしまっては本末転倒だ。大切なのは、単に時間を短縮することではなく、自分が何を大切にしたいのかを考え、それに合った時間の使い方を選んでいくことではないだろうか。

メディテク部
ベスト・データサイエンティスト賞を受賞

順天堂大学健康データサイエンス学部の「未来創造データサイエンス・チャレンジ」が8月3日に開催され、メディア・テクノロジー部の清水美都さん（13H）、松本悠希さん（14H）、木谷礼杏さん（14H）が医療健康部門でベスト・データサイエンティスト賞（1位）を受賞した。

自分たちで考えた仮説を厚生労働省のデータで分析。暖かい地域ほど骨折が多く、後期高齢者ほど骨折リスクが有意に高まることを発表した。また、富山県は後期高齢化率が全国9位と高く、高齢化を前提とした医療体制の構築が地域医療の課題だと訴えた。統計学の分析やグラフ化が高く評価された。


賞状を手にする（右から）松本さん、清水さん、木谷さん

編集手帳

今号は文化祭当日の発行になったので、文化祭ガイド紙面も兼ねています。新聞部の展示は2階学習室です。今年度の学校新聞本紙（拡大版）や、速報全て、県内・全国の高校新聞なども展示しています。ぜひ見に来てください！

文化祭の様子を伝える速報も、本日中に2号発行します。

◇　◇　◇

大人になりたい　金欠
パペが欲しいです…　ゆーごもう数学やりたくない　こず
45点　attttttt
テストピンチ　h
鼻詰まりがつらい　鼻炎
リスペクト大事　14
長女次女三女　長次三
食欲の秋！　モモンガ
秋だなあ　紅葉
コンセントどっか行った　目薬
最近寒いなー　わさび